

# 日曜日には TVを消せ

## NO.2

★74.12.15(日)

★<夢の島少女>誌上再放送

★特別付録<夢の島の少女>コピイ

★制作★PHC・TV★豊橋=札幌

★提供★混血桃色通信=PHC

(豊橋市東小浜町129)

白井方・藤田眞男)

### ★夢の島少女への片想い★★★

<夢の島少女>が放送されてから2ヶ月が過ぎ、本誌を出してから1ヶ月たちました。

平々凡々たる毎日で、これといつて新しいこともなく、時間はダイヤ通りに進行しているのに、ぼくはいまだに<夢の島少女>にこだわり続けたいのだ。

なんが、ぼくとYOKO Aの二人だけ空騒ぎしてるみたいだけど「すごい、すごい」を百回云っても追つかないのだから、こうなったらトコトンやる。

あの75分間は何だったのか? たしかすると、<夢の島少女>は「もしかすると、あれも」ではなく、「もしかすると、これしかない」尖端的表現への、もうくつおぼろげな架構があり、銀河鉄道があるかもしれない。

こんな、ものの云い様は、ぼく自身はがゆくて仕方ない。信用できない。うしろめたい。でも…。

唯一、信ずることができるのはあの感動が、ぼくにとっては不動のものだといふこと。日常の時間においても、フィクションの時間においても、あのような75分には、いまだかつて出会ったこと

がなかった。ホンモノ——と云っては、返って遠ざかってしまいそうだ。

すべての時間につき合っていらぬいのと同様に、我々はTVといふ、どこまでも膨張を続ける宇宙のように流れ、放しのもうひとつの時間にも、つき合いいきることは追いつけない。TVを光みをみているうちに消滅した星の光れない。

どこまでもいっても<送り、放し><受け、放し>, いつまでもっても出会えない。真崎・守ふうに<ひとり遊び>と云ってはカッコつけすぎか。キャッチ・ボールの相手はノックペラボウ<TV><技術論>の壁。ぼくが<TV>は、TV放送を支えるシステム(法・資本・国家など)内にある)すべてを指す。ウンザリするような、つかみどころのないシステムだ。

流れ、放しの流れが一瞬停止したようにみえたとき、名前のない海が現われた。ぼくは海に溶け込み、夢の島少女に出会った。

すべてが溶け合い、すべてが輝いていた――

# 補足と訂正

▼夢の島、じゃなくて「宝島」  
12月号・wwwの読者から  
投書にこんなのがある。トヨ  
TAが知らせてくれた。

「去る10月15日の夜NHK・  
TVで『夢の島少女』をみて以  
来、NHK転員としての鈴木志  
郎康に、あるいは16ミリカメラ  
マンとしての鈴木志郎康に、尊  
敬の念を抱いています」  
（国分寺市・小島仁・24）

え!? ホント? と、ぼくもTV  
もおどろいた。わがTV  
純粹桃色通信は、そのタイト  
ルを志郎康さんの著書からいた  
る。いまだりして、あながち本  
縁がないことはないのだが、読ん  
どくは彼の書いたものは、ほ  
ど読んじて、本転がど、読んだ  
といふ雑誌の連載で、彼が記事の  
素人に写真も相当してゐるのみで、  
マイもんだ。  
な

昭和10年生れ・早大仏文科卒。  
NHK映画フイルムカメラマン志  
郎康・詩人・本名「鈴木康之」。  
で生計を保つ——とのこと。  
さて、「夢の島少女」のカメ  
ラマンが、ホントに鈴木志郎康  
であつたかどうかだ。TV特集には撮影・葛城日が  
号のTV特集には撮影・葛城日が  
イド「シナリオ」1月が  
で、あつたかどうかだ。TV特集には撮影・葛城日が  
サタデーライブ」および「シナリオ」1月が  
Aもぼくも、感動のあまり、クトレジットを読みとるところでは定  
められたのと、眞偽のほどは定  
められない。仮定としては、力メ  
ラマンがもう一人いて、それが定  
められたのも、彼が力メラマンと  
してはなく、彼が力メラマンとして  
いたとも考えられる。  
レジットを読みとるところでは定  
められたのと、眞偽のほどは定  
められない。仮定としては、力メ  
ラマンがもう一人いて、それが定  
められたのも、彼が力メラマンと  
してはなく、彼が力メラマンとして  
いたとも考えられる。

YOTAが、昔キネマ旬報に  
投稿してて、今はNHK札幌支  
局におられる原田隆司さんから  
聞いたところでは、クレジット  
には、多分入鈴木志郎康「名義  
のカメラマンだ」という二つの  
こと。どちらの二つが、正しい。YOTAの云う  
ところによると、マサトにあらず、マサトヘルベル  
が正しい。テーマ以外には、カノトにあらず、カノトヘルベル  
が正しい。でも使われたかもしれない  
に影響を与えた。十七才のYOTAの作曲家

あるいは、すべて外れてるか。  
それもよくわからぬ。だが、  
理解者であるらしいことを思つ  
げ泰春の世界をつなぐ役を果た  
したかもしれないと考えやすい。  
結局、ひどくいいかけんな話。  
で、本当のところは何もわから  
ないんだけど。先号にも、かな  
りテタラメなことを書き並べた  
のに違いない。今の内にあやま  
つちがいはない。おこう。ゴメンゴメン。  
▼先号の10ページ、YOTAの  
文中「スクビヤ民謡」とあるの  
は、ぼくの読み違いで、「スク  
ビヤ」が正しい。ゴメンね。



「紅い花」「夢の島少女」というのは、ぼくの独断的につけにすぎないかも知れないが、更にこじつければ、「マザー」のラストの海は、ヨリマザーの「TTA」のいじれ。

「さすらいライダー」のバラードをテーマとしているのではなくて、あの唄は川河は流れても、あの方は、考へてみられない。すなゆうへあるのかは大まい!」

「さすらいライダー」の方は、ドーナツもつながらり得るかもしれない。

さすらいの形としても、それは、ねえにしたものなのが、マザーをラストの海拡ラナ。

さすらいの形としても、それは、ねえにしたものなのが、マザーをラストの海拡ラナ。

さすらいの形としても、それは、ねえにしたものなのが、マザーをラストの海拡ラナ。

「やっぱりこじつけだぬエマザーハーバーににおける新たな母性へ」に桃色通信機3次・ホル号とモフナリ得るかもしれない。

さすらいの方は、ドーナツもつながらり得るかもしれない。

さすらいの方は、ドーナツもつながらり得るかもしれない。

さすらいの方は、ドーナツもつながらり得るかもしれない。

さすらいの方は、ドーナツもつながらり得るかもしれない。

さすらいの方は、ドーナツもつながらり得るかもしれない。

さすらいの方は、ドーナツもつながらり得るかもしれない。

たいてい早朝。少婆ちゃんが、やんばるの島少女には、小夜子の母らしい人もいたようだ。それとも、少女に病気をする日の人たちが、帰郷しないねいつの本名はない。

たいてい行つてやれなくてすまないねいつの本名はない。

少女には、駅まで床にのる。少女が、駅まで床にのる。

少女には、駅まで床にのる。

返しが、ライダーハウスの裏で、ポジといつても、それは、ねえにうな比較においが、さすらいの形としても、それは、ねえにうな比較においが、さすらいの形としても、それは、ねえにうな比較においが、さすらいの形としても、それは、ねえにうな比較においが、さすらいの形としても、それは、ねえにうな比較においが、さすらいの形としても、それは、ねえにうな比較においが、

大いに思う。この二曲の順序は逆になつた。デイランらしい考え方。が流れりわけだが、初めピーターマンの「FFOND」は、ボブ・ディランの「YODA」を終曲として使うつもりだ。

が流れりわけだが、初めピーターマンの「FFOND」は、ボブ・ディランの「YODA」を終曲として使うつもりだ。

が流れりわけだが、初めピーターマンの「FFOND」は、ボブ・ディランの「YODA」を終曲として使うつもりだ。

が流れりわけだが、初めピーターマンの「FFOND」は、ボブ・ディランの「YODA」を終曲として使うつもりだ。

が流れりわけだが、初めピーターマンの「FFOND」は、ボブ・ディランの「YODA」を終曲として使うつもりだ。

「メタな録音ト・イケヤ」にも少女が出でる。

「夢の島少女」のデリケートなもの成績だらう。

Mのステレオ・システムをフル下に活用して話題になつたと記憶される。へ家にはスピーカーが一台しかなく、ステレオ効果まで

Aの手紙からコメット・イケヤは聞いた! 66年といふと、僕は中学3年で、やたらラジオ・ドラマが好きだったのをよく聞いた。コメット・イケヤは聞いた! 66年といふと、僕は中学3年で、やたらラジオ・ドラマが好きだったのをよく聞いた。

佐々木昭一郎のラジオ・ドラマ・YODAがくわしいことを知らせてくれた。以下、YODA





## 佐々木昭一郎の 二つの文章

TVといふメディアの性質上、VTVへ作家の言葉が、我々の目にや耳にふれることは、ほんとうにないし、また、それでいいの

いだと思つ。 | それではいけないノダ、と思っているらしい人々も少なくないようだが、例えれば、キヤロルをとり巻く人々を作りこなす人々。

それはさておき、先日、本屋さんでシナリオ1月号を開いてみたたら、テレビ事件簿という特集があり、その中に、佐々木昭一郎のエッセイもあつた。いや480円は高いな、と迷つた後、金を払つて買って、下宿へ戻つた。する

。佐々木昭一郎のエッセイが、前ページに掲げた、この高村賢治氏からお便りが届いていた。さあ付けてみたのが、前ページに掲げた、この高村賢治氏からお便りが届いていた。47年3月29日エ

ジオ・ドラマを覚えていろ人がいるかと思えば、こんな古い新聞記事を見つけて送つてく広いものだ。おまけに、KENさんは見てないそうだ。とにかく、ありがとう。

「さすらい」というゆげで、ぼくは、いつペんに佐々木昭一郎の二つの文章を目にすることができ、それをしてコピしてみると、みんなにも読んでもらえるわけなのだ。『読売』の方は、KENさんからもらったコピが、少し不鮮明なので、かなり読み辛いものになるかも知れないけど、想像力を働かせて補って下さい。ほかにも、この二つの文章について、しばらくが、口をはさんだりする必要がある。

「放送という言葉に返り点を加えれば、送り放しと読めるし」と短い忠告を与えられて二の世界に飛び込んでからもう十年以上たつた。放送も含めて、いわゆるマスコミはすべてこの片側伝達の病を引きずり続けている。

——と、いう書き出しと、結びの文が、彼のTVに対する考え方をよく物語つていると思う。

それから、「さすらい」のコマの写真があつて、これをみると、ひろしが出会つた少女がやはり、栗田裕美へひろみがおつたようだ。

あるはずのない場所、いうはずの友い人を捜そうとする空想は持つていい世界である。佐々木昭一郎のモチーフは、三年後の『夢の島少女』へ受けがれているようだ。『マザーリ』以来、一貫していふ。この自慢ぐるしい世の中で、カメラとの出会い——それも、一つの方法を追い求め続けていくのだから、またおどろきがない。このへ世ドラマ。五年間に、わずか三本のTV番組で、佐々木昭一郎が、一本二本と数えられながら、人間が人に出会い、我々はTVに出会い、カメラがTVに出会い、我々はTVに出会い、カメラがTVに出会い、など、それはへ出合いで、それが人間が人に出会い、カメラがTVに出会い、など、それはへ出合いで、

☆今号より、TVに映す(関係ないことも)なんだからと雑多な事柄を取り上げてゆくための連載ページを設けます。リレー連載にすることも考えていいが書いてもらいたい。魁して: 何が書いてもんにも何

# OLLIE & OZZ

—1へ連載オ1回—

続★現代歌情★TV版—  
時計じかけの  
虹の蝶

〈Strange Orange〉

昭和49年、我々とTVの状況と「夢の島少女」をつき合ひやめて、その意味するところは何でせあろうか、というようなことを考えていたら、なぜか、浮かび上がってきたのは、「山口百恵」。飛すぎて、はてどもさか突然考えていたところ。

の中には、よく出来た人がいるもので、ぼくが云いたかったことと論旨明晰に展開してくれた美学の終焉へ反テレビ的流行歌論! しがそれである。論者は、原作者真崎・守、「共犯幻想」の原作者である斎藤次郎。渋谷に子供セントナーといふ調査研究所がある、ぼくはGYAさん(村上知彦)と共に、この子供セントナーダが何度も「やっかいになつたの」だ。ぼくはGYAさん(村上知彦)と一緒に「不幸」という名前をある。斎藤次郎氏はここに「不幸」と呼ばせてもうおう。次郎サインとして、次郎サンの「反テレビ的流行歌論」であるが、これらも全文コピイしたいのは山々だけ

ど、それよりも、みんなにも「K」放送文化を一部ずつ買つてもうつた方が安くつくのだ。一部150円也。エヌ・エツ・チケ。大きな書店へ行けば、たいてい書架のスマコの方に、たいていいる。『飛書店』が売れ残つて、中川方・池田博明、中川方・池田博明

まで直接注文すればよいと思います。エヌエツチケ。ぼくは別にNHKのマワシ者ではなくので念の為。ピ! エツチシ!。齊藤・原田西氏の文を読みたい人は、大蔵書店へも行かず、NHKに注文せず、YOTAこと、原田西氏の文を読みたい人は、池田氏に切手70円ほどをとえて申し込めばよいかと思します。札幌市東区北12東1中川方・池田博明まで。

ば、今年のTV状況の面、端は

齊藤・原田西氏の文を読みてもうえれば、ぼくはもう何も云わずに済むの。本稿はこれにて落着! 件の落着! 件の落着! 件の落着! 件の落着! 件の落着! 件の落着!





んぼくは、"幸運"にも一時間の完成ファイルを見た。不幸番組としてみたのである。不幸されたりしたがって、出来上がった番組と一緒に30分にカットされた放送され初めでTV番組とは放送されて語ることはできぬはず。ついでTV番組としての「海鳴り」であるから、斎藤はTVにならぬの放送されてしまつたのである。それでまたのだ。されだけの事件だ。

藤正治とはちがつて、"不運"にしても得られない。したがつて、出来上がつたファイルムがカットされることもあらねば、TVの野球中継に向つた。それだけの事件だ。

んぼくは、幸運にも一時間の完成ファイルを見た。不幸されたりしたがつて、出来上がつた番組としてみたのである。不幸されたりしたがつて、出来上がつた番組と一緒に30分にカットされた放送され初めでTV番組とは放送されて語ることはできぬはず。ついでTV番組としての「海鳴り」であるから、斎藤はTVにならぬの放送されてしまつたのである。それでまたのだ。されだけの事件だ。

ちがい、企画会話を通さずに、先にクラシック・インで見るらしい。したがつて、出来上がつたファイルムがカットされることもあらねば、TVの野球中継に向つた。されだけの事件だ。

藤正治とはちがつて、出来上がつた番組と一緒に30分にカットされた放送され初めでTV番組とは放送されて語ることはできぬはず。ついでTV番組としての「海鳴り」であるから、斎藤はTVにならぬの放送されてしまつたのである。それでまたのだ。されだけの事件だ。

龍村仁自身は、「キヤロル」が「ドキュメンタリー」のワク内で「唐突に」放映されてゆくことには、まさに、「唐突に」おいてドキュメンタリーワークになりうる、と考えたという。一度、TVにおいて「唐突に」一作、「唐突に」があり得るだらうか。

「唐突」と期いつつ、組と組時間が、唐突に唐突に唐突に唐突にならう、と思つた。それで、夕方のロツク番組の最後の12行によつて、どちらかが決して単なる謙遜などではなくなるのだううが、かくのうちにあり。そのことは、木昭一郎の三年前のエッセイ、「唐突」とは、決して単なる謙遜などではなくなるのだううが、かくのうちにあり。

ちがい、企画会話を通さずに、先にクラシック・インで見るらしい。したがつて、出来上がつた番組と一緒に30分にカットされた放送され初めでTV番組とは放送されて語ることはできぬはず。ついでTV番組としての「海鳴り」であるから、斎藤はTVにならぬの放送されてしまつたのである。それでまたのだ。されだけの事件だ。

藤正治とはちがつて、出来上がつた番組と一緒に30分にカットされた放送され初めでTV番組とは放送されて語ることはできぬはず。ついでTV番組としての「海鳴り」であるから、斎藤はTVにならぬの放送されてしまつたのである。それでまたのだ。されだけの事件だ。

藤正治とはちがつて、出来上がつた番組と一緒に30分にカットされた放送され初めでTV番組とは放送されて語ることはできぬはず。ついでTV番組としての「海鳴り」であるから、斎藤はTVにならぬの放送されてしまつたのである。それでまたのだ。されだけの事件だ。

藤正治とはちがつて、出来上がつた番組と一緒に30分にカットされた放送され初めでTV番組とは放送されて語ることはできぬはず。ついでTV番組としての「海鳴り」であるから、斎藤はTVにならぬの放送されてしまつたのである。それでまたのだ。されだけの事件だ。

藤正治とはちがつて、出来上がつた番組と一緒に30分にカットされた放送され初めでTV番組とは放送されて語ることはできぬはず。ついでTV番組としての「海鳴り」であるから、斎藤はTVにならぬの放送されてしまつたのである。それでまたのだ。されだけの事件だ。

んぼくは、幸運にも一時間の完成ファイルを見た。不幸されたりしたがつて、出来上がつた番組と一緒に30分にカットされた放送され初めでTV番組とは放送されて語ることはできぬはず。ついでTV番組としての「海鳴り」であるから、斎藤はTVにならぬの放送されてしまつたのである。それでまたのだ。されだけの事件だ。

藤正治とはちがつて、出来上がつた番組と一緒に30分にカットされた放送され初めでTV番組とは放送されて語ることはできぬはず。ついでTV番組としての「海鳴り」であるから、斎藤はTVにならぬの放送されてしまつたのである。それでまたのだ。されだけの事件だ。

藤正治とはちがつて、出来上がつた番組と一緒に30分にカットされた放送され初めでTV番組とは放送されて語ることはできぬはず。ついでTV番組としての「海鳴り」であるから、斎藤はTVにならぬの放送されてしまつたのである。それでまたのだ。されだけの事件だ。







★12月10日の朝刊に、芸術祭名賞の発表が報じられていたので、ここに紹介しておく。NHK・T.V.の参加作品は「ユタとふしぎな仲間たち」のみ受賞。

芸術祭は計39回。十月十六日から十一月十五日までの一ヶ月間に参加公演、作品は、九部門で三百四四あり、最高成績をもつた。

受賞者は次の通り。

芸術祭大賞

◆テレビ（ドラマ）中部日本放送の「火の鳥」▽東京放送の「あいさつ」▽（吉川メンタリ・東海テレビ）昭和49年春大賞

△ラジオでは前号でふれた「ダグ・イモルフィズム」と同質の二像へN.H.K.も受賞。

/ CBC・東海の二作品が受賞

テレビ部門

芸術祭大賞のテレビ部門では三作品が受賞したが、このうち二作品は名古屋のテレビ局の制作。

CBCの「火の鳥」は水谷洋子のオリジナル脚本、桂田明美の演出、山陰の田舎町を舞台に名古屋（愛原小春）と少年（中島久）の心のふれあいを描いた作品。十日放送。CBCが開局を記念する四十五年の「夢のあく

年に次いで受賞。

△テレビ（ドラマ）NHKの「叶々ふしぎな仲間たち」▽（キムンタリ・日本テレビ）「エスキモーの道」▽（横浜放送）「赤恋旋風」▽（長野放送）「みやまの海」▽（高知テレビ）「迷いの塔」▽（茨城テレビ）「恋の塔」▽

委員長は、誰であろう。事件に際して、「おらあ知らねえだ」と吹きかえでやっている。十九日に見た「大江戸捜査網」は田舎から江戸に出てきた女の子が、彼女を売りとばそうとしたチンピラと逆に愛しあう話だったが、話はともかく、この女の子がふたごとに「だんべ」「おらあ」と典型的方言をしゃべりだし、そのたびにうんざりしてしまった。方言はその土地の長い歴史、毎日の暮らしから生まれてきた、もっと生き生きとした言葉のはずだ。喜びや怒りがいっぱいに詰っている。時にはものすごく下品な言葉もあるだろう、その土地の人だけが持つ悲しい言葉もあるだろう。それを「だんべ」「おらあ」といえすれば方言だ、というの

★芸術祭執行委員会の委員長は、誰であろう。事件に際して、「おらあ知らねえだ」と吹きかえでやっている。事件に際して、「おらあ知らねえだ」と吹きかえでやっている。十九日に見た「大江戸捜査網」は田舎から江戸に出てきた女の子が、彼女を売りとばそうとしたチンピラと逆に愛しあう話だったが、話はともかく、この女の子がふたごとに「だんべ」「おらあ」と典型的方言をしゃべりだし、そのたびにうんざりしてしまった。方言はその土地の長い歴史、毎日の暮らしから生まれてきた、もっと生き生きとした言葉のはずだ。喜びや怒りがいっぱいに詰っている。時にはものすごく下品な言葉もあるだろう、その土地の人だけが持つ悲しい言葉もあるだろう。それを「だんべ」「おらあ」といえすれば方言だ、というの

テ

レビでは方言というと決まって「だんべ」に「ん」というものだ。かといって逆に

ように田舎のおじさんやおばさん、当世風な若い女の子が

マイク片手に慣れ親れしく話し



「海鳴り」より一年前の四十六年に制作された「十八歳・男子」には、映画「キャロル」でみせた龍村の鋭く優しい感性があふれていた。テレビドキュメンタリー「キャロル」との比較ではなく、映画を引合いに出すのは、私がドキュメンタリー「キャロル」を見ていないからだ。

故郷を捨てて、東京へ出てきた信州生れの若者はソバ屋に住み込む。渋谷あたりだろうか、ハチ公の像が繰返し写される。

犬、猫、鳥などの生きたのや死んだのが、「海鳴り」にはひんぱんに出てきた。「十八歳・男子」では、若者たちが、台所でネズミを捕えてガス死させるところがあった。若者は「やった、やった、おめでとうござい」と暗黙的に喜ぶ。置物であれハチ公といい、「海鳴り」の猫を興奮させて面白がる男といい、あるいは猫の死体を子供たちが平然と見ている場面も含めて、龍村仁には、小動物嗜好の性癖があるようだ。

若者はソバ屋を辞める。「やりたいことをやる」性質らしい。マネージャーに暴力を加えられると、「言葉を大切にしたい、ぼくにとって暴力って、言葉しかない」。

逆に「おふくろを殺しそうだ」とか、乱闘用の体を鍛えようとするディビル・ジムを覗いてもみる。性名判断の紙を折つて、紙飛行機にし、ビルの上から飛ばす。高倉健にあやかりたい強者願望もある。

と書いてくると、この若者は何者かが直ちに浮び上ってくる。寺山修司の「家出のすすめ」に共感し、多分「現代の青春論」を小説にかかえて東京へ出てきた家出少年なのである。「高三コース」の詩壇投稿者が寺山の周りに詠歌した時期があつたが、この少年も寺山修司にあこがれて家を出たのであろう。

変身願望の果て、少年は花嫁衣裳をつけて「私はケンビ鏡が好きです。古いランプが好きです……東京、東京、東京」と叫ぶと、画面にはトイレットが写される。

少年が寺山修司の世界を、その言葉と感性でなぞろうとすれば、カメラも同調して、寺山的世界を描いてしまう。

この余りにも寺山的世界の再現に、私は被写体の問題か、龍村の意図的な方法によるものか、ととまとった。それだけであるなら、私たちはすでに可視化されたいくつかの作品を見てきた筈である。感性のデリカシーをとぎすまして、犯罪を犯していくであろうことを予兆させる若者像にも、私たちはすでに映像作品としていくつも出会っている。

・四六年六月 「人間列島——十八歳男子」をつくる。なぜかノーカットで放送される。あとで局長室に招かれる。(龍村仁年譜より)

寺山は三十歳すでにNHKに書いた番組で「イタリア賞」を受け、NHKに貢献した。その後、NHKは寺山の方法を疎遠にし、寺山の方も電波メディアでは包括しきれないほど表現をとぎすませていくのだが、昭和三十八年の「現代の青春論」の中し子のような若者は、いまになつてもNHKが拒否する理由はない。「十八歳・男子」の原型は、寺山の手によっていくつかNHKを通過していくのである。寺山が描いた類型が、何年かあと、龍村仁によつて描かれたといって、NHKには拒否できるはずがない。

龍村はこのドキュメンタリーにおいて、全的にオリジナリティを發揮したとは、だから私には言えないのだ。ノーカットで放送されるのは当然であり、「あとで局長室に招かれる」とあるのは、ゴタゴタ屋龍村が、またもごとを食らいに高級監制室へ行つたとは思えない。ドキュメンタリーを含めて既成を規範にした番組を金科玉

条にしているNHKの方法に、この「十八歳・男子」はみどりにかなっているのだから。私はかなり逆説的に言っている。そしてこの番組では、十分「客観的、リアル」であったとは、断じて言えないことを付け加えておこう。

龍村仁のNHKでのゴタゴタは、年譜でもわかるように、表現行為の上でのそれである。彼の表現が常に突出しているために、表現に対しても保守的なNHKははじめないでいるのだ。NHKに限らず、組織は突出した表現に憲法で不寛容である。

大島渚の「日本の夜と霧」は松竹資本によって、扼殺されようとした。その時、松竹方組は大島に手をかすどころか、非難した。鈴

木清順が日活を解雇された理由は「わからない映画は悪い映画だ」と堀久作のメイ言に集約された。日活労組も映画労働者館木清順首切りの反対運動を起さなかつたばかりか、見殺しにすることで共犯者になった。

龍村仁も全く同じ状況に置かれている。NHKの懲戒免職处分に、日放労は手続的な團交をやつてお茶をこし、丸呑みした。龍村を（小野耕世も）首にした元凶はNHK小野会長と、日放労上田哲委員長（社会党参議院議員）である。上田は労働者の味方、表現の自由の守り手などが看板のマガーブであるだけに、一層ワルだ。

それにしても組織は、突出した表現にはビビル、ビビル……。

## 夢の島の少女

### 佐々木昭一郎

（テレビ・ディレクター）

十一月十四日のイリュージョン日記。私は今日も同じ夢を見た。私の意識は今、一人の少女を「活字」によつてなぶりものにし陥し入れようとしているある背景をカサに着た一人の男に向つて流れてい

る。その男は「無署名」だった。「無署名」はふちなしメガネだった。「無署名」は黒っぽいコートを着ていた。「無署名」のメガネの奥の陰気な目は何かを隠してネラっていた。全てが「無署名」だ

（著者正治）

つた。「無署名」は無垢の少女の心臓を一突きにしたのだ。私は昨日も同じ夢を見てしまった。少女の胸から伝わる血液が背負っている少年の私の背中にニカフのようにこびり付き、私は無人の夢の島のゴミを踏みつけて果てしなく歩いていくのだった。そこは海だった。

黒い空が同じ色の海につながっていて、風が吹いている。波の間に間に私の父親の死体が見え隠れして浮いている。黒いデコボコの岩の上に下駄をはいた少年の私が海を見ている。これが意識が芽生えてから私が記憶した最初の風景だ。これが何歳の記憶かも日本のどこの海かも分らない。なのに私の記憶にこびりついて離れようとしない。私は、記憶が芽生えてから、私がものを「見て」「感じた」全ての事柄を記憶に留めておこうとしたのは、父が私を江の島に連れていった時からだろう……。

中学二年の夏から、私はかつぎ屋をはじめた。上野から汽車で十六時間、仙台の先の鹿島台から歩いて三里の山奥にある父の兄の家から、四斗米をリュックとボストンに詰め込んで大宮駅で下車するのがいつもの手だった。東北線に乗るのは苦しかったが、郡山の二つ手前にある須賀川を通過するのが苦しかった。この駅で私の父は死んだのだ。6歳の夏、父は私の目の前で大量の血を吐き出した。血は窓ガラスにも吹き上げ、血だらけの私は立ちつくしてふるえていた。水兵が二人父の体を窓外に運び出し、真夏の駅のベンチで父は放つたらかされて死んだのだ。海を見に行つた次の日だった。翌日、東京からとんできた母と父の死体を見に行つた。ホルマリンが悪臭を放ち私のシャツに浸みこんだ。病院の庭一面に真赤なボタンが咲いていて、母のハンドバッグがその上にこぼれ落ちた。口紅と手鏡とチリ紙を拾いながら「あしたからどうしよう」と母が呟いたのを覚えている。ハンドバッグの止め金がこわれてクチを開け

いたままになつたのも覚えている。葬式が済み、私は小学校に行つた。クラスの全ての視線が私に集つた。その視線は私を異状な人間として見ているような気がしてならなかつた。私の体が悪臭を発しているような、匂いをかぐような視線だった。それ以来、私は人々の視線によって犯されているのではないかと云う恐怖におびえ続けようになつた。

中学生を卒業すると、私は英語の塾に入った。高校へは行かなかつた。相変わらず一ヶ月一回のかつぎ屋をやっていたのだがもううんざりだつた。何とかして独立したいと持ばかりが焦り、その頃流行の通訳になつて金を得たかつたのだ。英語塾は御茶水と神田の中間にあつた。丸坊主でツメエリの生徒は私一人だけで他の五〇人ほど生徒は銀行や会社から派遣された大人だつた。辞書を食うほど英語を暗記した。声を發して体で覚えるやり方は内閣的な私の性格を開放した。レスター・ホールというアメリカ人の牧師が担任だつた。何かにつけて可愛がつてくれた。私は、おちさんと呼ばれていた四〇歳位の中国人と机を並べていた。「きみは、一番若いから可愛がられるのだ」とおちさんはいつも言つていた。ある日、レスターさんは私を廊下に呼んで、「私をアメリカの大学に入れるようにするから頑張るように」とにっこり笑つて私の手を握つた。その時レスターさんの顔はキリストのようだつた。私はどんな事があつてもこのチャンスは逃がすまいと思つた。三ヶ月も経たないうちに自分でも不思議な位進歩した。F.E.Nの「口笛を吹く男」と云うラジオドラマや、「ボップ・ポープ・ショー」などの英語が、ほとんど理解できることになつていて、この事を逐一レスターさんに報告した。レスターさんは気に入つた生徒を毎週土曜の夜、自宅に招待してくれるようになつた。私は中国人のおちさんといつもいっしょに出かけた。その家は有栖川宮公園の近くのレスターさんの教会と同じ敷地

にあつた。コーンスープ、コンピーフ、玉ネギの薄切りをパンの間にはさんで食べるハンバーガーがいつもごちそうだった。すべて生れてはじめて食べるものばかりだった。記憶が芽生えてから、楽しいと感じたのはこの時期がはじめてだった。私は有頂点だった。いつもアメリカの大字の事ばかりが頭にこびりついて夢のようだった。が、そんな夢が、バカみたいに一変する日がやって来た。ある日、私一人だけがレスターさんの家に呼ばれた。レスターさんは険しい顔をして、私にお祈りをさせた。それから、身を清めるよううに私の手を取った。私は何の事かさっぱり分らず、言われる通りにした。私は吸い込まれるようにいつもハンバーガーを食べた居間の裏手にあるシャワー室につれて行かれた。シャワー室の扉は下の方が三十センチほど切り取られていて、外から見ると人間の足だけが見える仕掛けを作っていた。私はシャワーを浴びた。するとその三十センチのスキ間からレスターさんがタオルを持って覗きこんでいるのだ。私はその時はじめてこの人が何をしようとしているのか咄嗟に理解する事ができた。私は夢中でシャワー室から飛び出して身体も拭かずに洋服を着た。レスターさんは私の足元にすがりつき、何やら訳の分らない事を口走っていた。六月の末だった。私は汗だらけになつて夜の道を走つた。もうキリストの裸像など見るのもイヤだった。翌日、塾へ行つた。何となくクラスの視線が異様に私に向けられているようで、私は下ばかり向いていた。その視線は、父がのたれ死してから、はじめて小学校に登校した日のものと同じような気がしてならなかつた。私は、私自身の存在が、人々に対しても何か卑猥な響を発しているような錯覚にとらわれて仕方がなかつたのだ。私の存在が、人とは違つて異状で、汚らしい悪臭を放つてゐる、と感じるようになつていつた。それはなにもレスターさんの事が全ての原因ではないのだ、と思つた。電車に乗つてい

ても人々の視線が気になつたから、私はいつもドアガラスに鼻がひつつくようにして外ばかり見なければならなかつた。一種の対人恐怖症にずっととり憑かれていたのだった。アメリカの夢から醒め迄今一週間はかかつた。私は塾へ行くのも止めた。当面、何とかして英語を進歩させ、同時に食べて行く方法を探すこととした。そんなある日、新聞広告で通訳募集の広告を見つけた。新宿駅から歩いて十分、今風林会館から三百メートル位裏手にあつたホテルメトロが募集主だった。焼跡の原っぱの中の白いモルタル風の二階家だった。通称兄貴、タンさんと呼ばれている人が支配人だった。私とレイ子さんと云う女の二人がその日のうちに採用された。レイ子さんは住み込み、私は朝9時から夜9時迄の日勤だった。仕事はアメリカ兵を部屋に案内し、ベッドシーツを取り交換するのが主の下足番だった。日給三百円と云う約束だった。レイ子さんの仕事は電話交換と受付だった。髪の長い目の大きな美人だった。十七歳を二〇歳とウンをついていると私にだけ教えてくれた。私は十五歳を十八歳と偽っていた。ある日レイ子さんは片足血だらけになつて階段から落ちて來た。それから毎日泣いていた。一週間位経つと、すい化粧顔に変り、私にはクチもさいてくれなくなつた。十日目に支配人は五〇〇円くれた。そして年齢を偽つたから給料を減らした、とすぐんだ。私は他に行く所がないので、もっと働きたいと云うと、「アメリカ兵の言う事をきくな」もつと働かせてやると言つた。私はキリストの裸像を思い出し、辞めることにした。辞める日に、レイ子さんが千円くれた。返そうと思ったが、なぜかボケットに入れてしまつた。私は何のあてもなく新宿を歩いた。新星館で「狂恋の果て」と云うフランス映画を見た。ジャン・ギャバンとディートリッヒの映画だった。浮氣女に夢中になつた男が全てを失なつて最後に女を殺す物語だった。そのみじめつたらしいうじうじした男の生活

が、何故か私の来るべき姿なのではないか、と想像しづとした。同時に胸がスープとしたのを覚えている。何とかして英語で身を立てたいと思い、立川のキャンプや成増、築地の海軍病院に売り込みに通つたのだが、いずれもゲートのM.P.から門前払を食わされた。夜はF.E.N.を聞いて勉強し、昼は新宿の安映画館に入りつきりでアメリカ映画の英語を聞く生活が十日ばかり続いた。電車賃が惜しいので歩いて通つた。そのうち、帝都日活の上に三〇円の映画館があるので歩いて通つた。それを主人公と同じように最後はボロボロにのを発見し毎日通うようになつた。が上映されている映画はフランス映画ばかりだった。どのアメリカ映画よりも胸に響いてくるものが多かつた。それ等は皆、不幸な主人公の異状で犯罪的なものばかりだった。私はそれ等の主人公と同じようにその後はボロボロになつてしまふ人生に自分を置きかえることを想像して異状な興奮を覚えたのだった。悲痛な恋の物語が多かつた。が、それ等は遠い国遠い物語なのに身近な現実の出来事として私をとらえて離さなかつたのだ。ダメな方向に全てが押し流されて行く人物に光を当てて描こうとする作家はまた何とやさしく、残酷な人だろう、と考え込んだりした。「望郷」「シーラ山の狼」「令嬢ジュリー」「鉄格子の彼方へ」「狂恋の果て」。ダメな人がダメなりに生きて行ける見本のようなどを示された私は、それからといふもの、一層空想にばかり耽るようになり、あらぬ事を考へては新宿と家の間を歩いていたのだった。空想する、と云う事は私を増々ダメにして行つた。英語の勉強は当然のよう停止した。そんなダメである日、私は何となくレイ子さんに会いたくなり、メトロホテルの方向に歩いて行つた。ホテルの前にさしかかった時、一人のレインコートを着たふらふらになつた男が、十人ばかりの群衆にとりこまれてばかり雑言をあびせられていたのを見た。その男はコートのエリを立て、顔中血だらけだつた。群衆の中にはアメリカ兵が四人いた。男はバツが悪そうにと

ばと歩き出し群衆は散つて行つた。男は人々の視線をあびていながら必死にそれを無視するようにして歩いて行つた。男は、一年前私の家の近くの位置小屋に住んでいた金子万吉さんだつた。私は万吉さんが「世界は人殺しを商売にしているのだ」とクチグセのようにくり返していた音葉を想い出した。万吉さんは横須賀の米軍基地で死体処理をやつていた人だつた。ある日、万吉さんに連れられて横須賀線に乗つた。電車の中で、万吉さんは「一日二千円になるからやつてみないか」と仕事の内容を説明した。朝鮮戦争で戦死した兵士のバラバラ死体の五体を合わせ、包帯でグルグル巻きにすること。五体は一致しなくてもいいからとにかく適当につなぎ合つて巻いてしまえば良い。大金持になれる。どうせ世界は人殺しを商売にしているのだから、と云う事だつた。私は横須賀のゲートに着く迄、万吉さんの話を信ししなかつた。海軍基地のゲートには銃剣を持ったM.P.が4人いた。私は当然、追つばられた。万吉さんは遠えていた。ゲートのすつと奥の方に黒い船が止つていて。その船の底で万吉さんはこれから仕事をはじめるのだ。彼は誰かそばに居て欲しかつたのだ。私は電車賃が無いので駅の改札口で万吉さんが帰つて来るのを待つていた。万吉さんは酔つて帰つて来た。帰りの横須賀線はガラガラだつた。万吉さんは一言も発しなかつた。浜で東横線に乗りかえた。電車は混んでいた。人々の視線が万吉さんに集中した。彼は異臭を放つていたのだ。今日はシャワーを忘れた」と万吉さんは小声でついた。人々の視線を感じたのか万吉さんは次の駅で「気が悪くなつた」と言って一人で下車して行つた。その万吉さんが、新宿のメトロホテルの前で人々になぐり倒され同じような視線によつて殺されかけていたのだった。私は万吉さんに声をかける事もできなかつた。一年前横須賀に行つた記憶が現在の事のよう感じられ、今日の前の出来事がずっと遠い映画のシ



つた。と同時に鳥肌が立つような感動を覚えた。これ迄観たどの映画よりも熱い感動が全身に伝わった。今、人の想線を全身で浴びて殺されかけている三十を過ぎた万吉さんが、どうしても十五歳のこの私と同じ人物であるような気がしてならなかつた。人々に何か卑猥な怒きを発して存在している等質の人間であるような気がしてならなかつた。それからまた、新宿と家との歩きの生活は続いた。金が無くなると品川の専売公社ビース工場で香料の大ピンを運ぶ仕事をした。四百円だつた。テネシー・ウイリアムズの主人公に魅かれ、ドストエフスキイの主人公やフォーカナーの主人公に熱中した。ダメな人物に心を魅せられダメな自分を励まそうとしたのだった——私は、自分が作ってきたテレビジョンの方法について苦こうとして筆をとつた。が、なぜかこのような幼児体験の記憶の断片を記してしまつた。私には、どうしてもそこへ帰つて行つてしまふ悪癖がある。私は「記憶」をノスタルジーと考えた事は一度もない。むしろその逆だ。ものを、「見て」「感じ」とついた何の背景がない幼少の頃の私は眞実の私だたと思う。意識が芽生えてから、私は私が体験し、記憶したものの全てを重箱のスミをつつくようにならぬ。私は私が「眞実」からほど遠い所に居る。私が私に頭の中に記ロクして詰め込んでおこうとしたのだった。現実生活者として背負を背負い、時代にコミットしはじめてからの私は、幼少の頃の私と比較すると、「眞実」からほど遠い所に居る。私が私のテレビ作法を敢えて語るとすれば、それはこの二つの間の眞実をゆれ動いている「私」を伝えようとしている何かだと考へる。



の前のドラムカンやゴミ箱を力いっぱいに投げつけ、ガラス戸はメチャメチャに破れた。彼は野球のピッチャーのようななかつこうで手当り次第に物を投げつけた。再び人々が群がり万吉さんを取り押えた。彼は「人殺しめ」と大声でわめき散らしていた。私は恐ろしか

ここで先に述べておいた同時代の苦みの影を記録したカメラの日を書いておかねばならない。

その一作品が、昭和49年度芸術祭参加の『夢の島少女』(NHK 10月15日放送)である。このカメラマンが葛城哲郎であった。同じ佐々木昭一郎演出の作品のうち、『さすらい』(昭和46年)『マザー』(昭和45年)も、葛城カメラマンとの共同作業で成立している。龍村作品『海鳴り』も彼との共同作業であった。『海鳴り』をみているうちに、さらに数年前のNHKの作品がオーバーラップしててきた。調べてみると『和賀郡和賀町』——一九六七年・夏(NHK、企画構成・工藤敏樹)で、この作品のカメラがまた葛城哲郎であった。

同一カメラマンの作風が、イメージ上似かよってくるのは自然なこととしても、こうして並べてみると、共同作業とはいえ、年代順に、共同作業者とも、時代の影をうつしていく結果になつていてことがよく判る。

『和賀郡和賀町』は、モザイク風に記録されたこの町の、いま、であった。『海鳴り』では、町が海辺の町に移り、さらに伝説・さつが添加される。『海鳴り』の一シーン、警官隊との衝突で、火のつけられたビルにカメラが近づき不思議な、としかいよいのない浮上感覚をうつしとる。この火の浮上感覚は、『夢の島少女』にも姿をあらわす。

火が燃えている。カメラが近づいていく。じっとみつめる主人公の顔。こうした表現方法が、従来のテレビ文法にかなつていれば、問題はない。『和賀郡和賀町』は、その点、構成が平均値に近づいていた。『マザー』も『さすらい』もそうであった。しかし『海鳴り』『夢の島少女』となると、そうはいかない。



## △鳥山 拙△

いちがいない。『夢の島少女』を、理解できない、芸術派の作品と批評することは、おそらく最も安易な姿勢なのである。『夢の島少女』は、昭和49年のテレビ・ドラマ状況に対する、一つの批判であり、つきつけられた批評でもある。存在自身がすべてを語る。これは、愛、についての現代、そのものなのである。

しかも、暗転の時代に、位置する、不幸な時期に生まれべくして生まれた宿命を背負っている。

暗転の時代に、理解不可能という、つまりわかりにくいという点で、ここにあげた一連の作品を引った批評は、ここに記録されたイメージと音によつて、昭和50年代には、確実に裏切られていくに違かない。

ローラー化、平均値化は、いつみれば、何も表現し得ない代表名詞であり、機能をもつてゐる点を思い知るべきである。

もし、ローラー化、平均値化が、テレビの特質とかいう、無署名性の理論をもつて裏打ちされるなら、葛城哲郎のもつてカメラの目によってといいなおしてもいい。

無機物のカメラは、無署名をあつさり通過して、時代をうつしてゐるのである。無論、そのイメージを全面的に信じる信じないので、そんな技術的、表面的な問題ではなく、とらえての上である。



トヨタ・トヨタ

トヨタ・トヨタ

撮影・構成

龍村仁